

地獄の最後の日々：アウシュヴィツの生き残りを救った赤軍解放軍

75 年前の強制収容所に何が起こったかを、生き残りが語る

【訳者 Greatchain】ここでは、「プーチン〈お前らの臭い口をふさいでやる〉：歴史の書き換えを許さぬ」<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/200121-6.pdf> で言われていることが、当時 14 歳だったロシアの少年の恐ろしい体験を通じて、生き生きと語られている。こんな話は何度も聞いて知っている、という人も、改めて読むべきである。それは、こんな恐ろしい話がそう何度も起こるはずはない、と信じている人のための警告でもある。これは脅しではなく、その雰囲気はいま現に、漂っていると思われる。21 世紀になってナチスの「優生学」が復活してきたと言っている人のカンは、当たっているだろう。
<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/191222.pdf> もう一つは、我々がアメリカによって騙されていたことを知るためである。これも、彼ら純粹悪というべき「深層国家」の悪が、具体的に見えてきたことからわかってきた。彼らは（ウソを含めて）そういうことが実行できる素質を持っている。こういったことはすべて、霊的な働きが関与しているのであって、物理的な説明によって、人が考えたり教えたりするようなものではない。アメリカの思い込みと、ロシアとの歪んだ関係については、「アメリカのファシズム小史」を見よ。
<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/161023.pdf>

RT – January 27, 2020



ソ連の兵士が、解放されたアウシュヴィツの囚人たちに手を貸している（ロイター）

エヴゲニー・コワレフは、1943年、ゲリラ斥候隊の任務中にナチスの捕虜になった。家畜用の貨物列車に積み込まれた彼は、アウシュヴィツに連行されながら、そこに待っているのは、当選、地獄だということを全く知らなかった。

赤軍が、1945年1月に、悪名高い死のキャンプを解放して75年目の現在、コワレフはRTに対し、彼の恐怖の日々を思い出して語っている。

「我々はこれらの貨車に詰め込まれ、どこかへ送られた。それはかなり長い旅で、1日半はかかったと思う」と彼は言った。コワレフと他のソ連の囚人たちを乗せた汽車は、結局Oswiecim 駅に到着し、それはアウシュヴィツから数分の所だったが、それでも、まだ彼らは、自分たちがどこにいるのかわからなかった。

地獄の門

「すべてが明るく、キャンプのまわり電灯に照らされていた。あまりにも明るくて、草の中の針でも見えるほどだった。…我々は、強制収容所がどういうものかさえ、全く知らなかった…まったく何も。」

彼らが到着するとすぐに、女性と子供たちが分けられ、一方に寄せられた、と彼は記憶している。コワレフ自身はまだ14歳だったが、彼は反対側に寄せられて、他の囚人の仲間に加わった。彼らは番犬や機関銃で武装した、親衛隊に監視されていた。

「彼らは我々を、衛生検査の建物である大きなバラックに連行した。その内部で、彼らは全員の髪を切り、水をかけ、我々の皮膚に何かを塗った。それから我々は、冷たいシャワー室に送られ、出口では手に番号を入れ墨された。」

コワレフは、「カナダ・セクション」32班に配属され、同じ仲間と倉庫で働いた。それはカバンを下ろし、汽車に乗って到着する他の囚人たちの持ち物を、より分ける仕事だった。



子供たちは、アウシュヴィッツのソ連軍による解放後、写真を撮られた（ロイター）

「人々はロシアやハンガリーから、続々到着した… あらゆる所から囚人が連れてこられた」と、コワレフは言う。「その仕事は、汽車から荷を下ろし、人々の服を脱がせ、彼らからあらゆるものを取り上げて、彼らを火葬場へ連れていくことだった。

「彼らは大勢の人たちを建物内部に押し込め、すべてのドアを閉め、ガスのスイッチを入れた。5分から7分以内で、すべての人が死んだ。」

生き残るために働く

特別命令班——ほとんどユダヤ人からなる——が、その後、死体を焼き、灰を除去するよう強制された、とコワレフは説明する。絶えず、自分自身の命の心配をしながら、囚人たちは野原に灰を埋めに行き、あるいは Vistula 河に捨ててに行った。もう一つの班は、宝石や金歯のよう貴重な残り物を、集めるように義務付けられた。

コワレフ自身は、野菜貯蔵小屋を建てるチームに割り当てられた。「私は地下室を掘り、壁を作ってコンクリートを流した。私たちはそのようにして、とても長い時間働いた」と、彼は言っている。



囚人たちは、ソ連がアウシュヴィッツを解放している間も、有刺鉄線の背後に見える（©Yad Vashem）

肉体労働が可能だったから、囚人たちの生き残りのチャンスは大きく広がった。とはいえ、死の脅威は、常にそこに漂っていた。コワレフの記憶では、毎週、何かの選択が行われており、それはキャンプの主任ドクター、ヨゼフ・メンゲレによるもので、そこでは囚人たちが溶鉱炉（熱風炉）の近くで、真っ裸にさせられていた。「私はこの選択を3度生き残ったのだ」と、彼は言っている。

ポーランドを越えて、あらゆる町や村でドイツ兵と戦いながら、延々と行軍を続けた後、赤軍兵士はついに、1945年1月27日に、アウシュヴィッツに到着した。「我々が救出されたとき、我々がどんな気持ちだったかは想像していただけるでしょう」と、コワレフは言う。「私たちは喜びの涙で叫んでいたのです。」

「私の最も生き生きした記憶は、ソ連軍がやってきて、我々を自由にしてくれたときです… それをどう説明してよいかわかりません… 私の感情は恐ろしく高ぶっていました。我々はそこを、生きて通り抜けられるとは、全く予期しませんでした。」

歴史を書き換える

それから何年もたって、クラコフで行われたフォーラムで、コワレフは、アウシュヴィッツを本当に解放したのはアメリカ軍だった、と人々が言っているのを聞いて、ひどく驚いた。彼は、その当時のポーランド大統領 Aleksander Kwasniewski が、発言に立ち、それはソ連軍だった、と正しく感謝を述べるのを聞いて感激した。

ポーランド人のアウシュヴィツ生き残りだった Wladyslaw Osik も、同様に、赤軍の役割を歴史から消して、書き換えようとする試みに腹を立てている。「私はこれらの[ソビエトの]兵士たちの手柄に、疑問をもったことはありません。私は常に感謝しています。そしてワルシャワの祝祭では、ロシアが代表であるべきだと思っています」と、彼は RT に語った。

RT.com 関連情報：「人々は真実を知りたがっている：赤軍退役軍人が、アウシュヴィツの解放と歴史の歪曲を語る」

「人々は解放者などいなかったと、よく言います… しかし、もし赤軍がいなかったら、私はここにいないでしょう」と彼は言う。

ポーランド大統領 Andrzej Duda は、月曜日、アウシュヴィツの国家追悼式典に、ロシアのウラジミール・プーチン大統領を、無視し、招かなかった。そしてこの2国は、外交的言い争いを引き起こし、両国が互いに、歴史的修正主義だと非難している。

ポーランドの Osik にとって、これらの行事からロシアを締め出すのは、「とんでもない間違い」である。しかし彼は、そのような雰囲気、何年も前から醸成されつつあると認めている。だが彼にとって、今日の政治的言い争いは、最も重要なことではなくなっている。

「私の母は、ワルシャワから（アウシュヴィツに近い）Oswiecim に戻りました。それが私の知っている全てです」と、彼は言っている。

——以上